

機関番号：32663

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520593

研究課題名（和文） 近世後期の特産地と肥料商

研究課題名（英文） Commercial Crop Areas and Manure Merchants in the Late Tokugawa Period

研究代表者

白川部 達夫（SHIRAKAWABE TATSUO）

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：40062872

研究成果の概要（和文）：本研究では畿内綿作・菜種作地帯、播磨綿作・菜種作地帯、阿波藍作地帯、関東主穀生産地帯の分析を行った。19世紀になると畿内以外の地域でも、市場は開放的になり、前貸し・出来秋現物決済による肥料商の市場支配は認められず、利率の低下が現れている。とくに天保期以後、地域市場の発展が顕著に表れ、肥料商売も特産品の発展に沿って展開したことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The purchase of manure had an important significance in the cultivation of salable farm products in the Tokugawa Period. This study examines the management of manure merchants in the late Tokugawa Period. Areas which this study concerns are "cotton, rape product zone" in Kyoto, "cotton, rape product zone" in Harima, "indigo plant product zone" in Awa, "grain product zone" in North Kanto and other areas. Local markets started to develop in these areas in the 19th century. According to the development, the manure markets came to be opened and manure merchants became less usurious. It has been traditionally alleged that usuriousness of manure merchants had been reinforced, but this study found otherwise.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：干鰯、鮭、魚肥、地域市場、特産地、肥料商

## 1. 研究開始当初の背景

日本近世近代の移行期において、農業経営の中からブルジョア的発展の可能性を追求

した戦前・戦後の研究は、干鰯・鰯粕、鮭粕などの購入肥料の多量な投下による木綿・菜種作などの特産物生産が発展した事実を明

らかにした。戸谷敏之『近世農業経営史論』（日本評論社、1949年）は多肥と緻密な管理労働を投入した西南日本型農業と自給肥料と西国に較べて粗放な東北型農業を区分して、前者にブルジョア的発展と挫折を見る研究の方向を定めた。さらに古島敏雄・永原慶二『商品生産と寄生地主制』（東京大学出版会、1954年）はこれを大阪の河内綿作地帯でさらに展開させて、肥料直段の高騰と木綿など農産品価格の低迷を指摘して、天保期における転換（挫折）を指摘した。また特権的都市株仲間商人や肥料商人の前期的商業高利貸し資本のブルジョア的発展への吸着を強調した。

一方、先進地域では国訴などの運動が農民の抵抗として展開し、ブルジョアの民主主義運動として闘われたこと、また山崎隆三『地主制成立期の農業構造』（青木書店、1961年）などにより明治の松方デフレ期まで、西摂津の木綿作地帯ではブルジョア的富農経営が存在したことが指摘されその根強い動きも示された。しかしこれらの研究は、主として農業経営論であり、肥料については史料の制約のため概略的にふれられるに過ぎなかった。古島敏雄らのテーゼは大坂市中の問屋仲間の肥料価格の変化と繰り綿直段の対比で導かれたものであった。山崎の検討した西摂津の氏田家の経営帳簿も購入場所と支払い総額が年次的に記載されているだけである。この面でもっとも優れた今井林太郎・八木哲浩編『封建社会の農村構造』（有斐閣、1955年）の岡本家の分析も経営分析（ブルジョワ的剰余の可能性と展開）が中心で肥料購入および市場については概括的に検討されただけであった。

その後、肥料流通については原直史『日本近世の地域と流通』（山川出版社、1996年）古田悦造『近世魚肥流通の地域的展開』

（古今書院、1996年）中西聡『近世・近代日本の市場構造』（東京大学出版会、1998年）平川新『紛争と世論』（東京大学出版会、1996年）石井寛治・中西聡『産業化と商家経営』（名古屋大学出版会、2006年）など優れた研究が出た。原の江戸を中心とした干鰯仲間と市場の検討や中西聡・平川新の蝦夷地の鮮粕などの流通と大坂問屋仲間の分析により、魚肥問屋仲間や全国流通については飛躍的に研究が進んだ。また石井等の泉州貝塚の米穀肥料商広海家の近代化をめぐる研究も貴重な成果であった。

しかし在地の肥料商人や消費者である農民との関係、いわゆる肥料消費市場についてはほとんど研究がないのが現状である。この点で、包括的指摘を行ったのは荒居英次「近世農村における魚肥使用の拡大」（『日本歴史』264号）であるが、ここでは年利40%を越える肥料商人の高利の前貸し、出来秋の現物支払いと農作物の安値引き取りという前期的資本の性格が強調されている。荒居の提出した史料は主として18世紀のもので、19世紀については不十分であり、その内容も経営分析から導かれたものは少なく、再検討の必要がある。肥料商人＝前期資本＝高利貸しという単純な図式にとらわれない実証的研究を進めることが急務となっているが、在村肥料商の史料は少なく、研究は皆無といっていよい状況である。

申請者は『江戸地廻り経済と地域市場』（吉川弘文館、2001年）において利根川中流域（中通り）における幕末肥料商人の経営分析を行い、幕末期には荒井が主張したような前貸し・出来秋現物決済、高利貸しなどは行われず、現金販売を中心に、掛け売りとなった場合も年利12%であった事実を指摘した。またこの地域では仕入れでも直売のスポット商売が行われたことも明らかにした。こ

これらの問題を深めつつ、平成18～19年には科学研究費補助・基盤研究C「近世肥料商人の基礎的研究」の申請を行い基本的な史料調査を実施して、その発見、分析に努めた。その成果として、当初予想を大幅に越える史料の所在が明らかになった。その最大のもは、それまで全く史料がないとされていた畿内先進地域・西摂津の肥料商史料の発見で、尼崎・梶屋文書がそれである。またこれに関連して、上瓦林村岡本家文書の公開が進んだので、農業経営帳簿の全面的調査・分析を行うことができた。さらに徳島県松茂町の藍商三木家が肥料商売を行っている事実がわかった。

こうした実績を踏まえ、今回平成20～22年度には「近世後期の特産地と肥料商」の科研費補助申請を行い研究を実施した。

## 2. 研究の目的

従来、ほとんど行われてこなかった19世紀前半の在村肥料商の経営分析を通じて、近世後期の特産地と肥料市場の動向を明らかにすることを目的とした。

具体的には、平成18～19年には科学研究費補助・基盤研究C「近世肥料商人の基礎的研究」において分析を進めていた畿内先進地域の肥料商である摂津尼崎梶屋の分析を行い、米・木綿・菜種の商品生産地帯における肥料市場の変動を明らかにする。また阿波の藍生産地帯では、藍師・藍商であった三木家の肥料商売を分析して、その実態を把握する。さらに調査と分析の進展にしたがって、適宜河内・近江の先進地帯、瀬戸内海、尾張・三河の木綿地帯、最上紅花地帯、関東畑作地帯などを設定して分析を行う。これにより原直史・中西聡両氏が明らかにした全国市場の動向にたいし、地域消費市場の動向が明らかになると期待できる。そこから、明治維新期前後の地域市場の変動がより具体的に解明

できる。

## 3. 研究の方法

研究方法としては、(1)調査・史料収集、(2)経営帳簿のデータ化作業、(3)分析と論文化が中心となった。

### (1) 調査・史料収集

従来、在村肥料商の研究は、史料が欠如していることからまったくといってよいほど行われてこなかった。このため本研究を推進するためには、まず史料の発見、撮影などの調査活動がなにより重要である。そこで大阪周辺、徳島県、兵庫県を中心に、愛知県、香川県、岡山県、山口県などの調査を行い史料の発見と撮影に努めた。

### (2) 経営帳簿のデータ化

研究の中心が、経営の基本データの蓄積・分析にあるため、経営帳簿のデータ化が欠かせない作業となった。発見されたほとんどの史料が基礎帳簿であり、経営全体を示すものは少なかった。このため各年度の肥料の仕入れ帳、販売帳から市場の変化を把握する必要があり、エクセルでのデータ化作業を継続的に続けた。

### (3) 分析と論文化

データ化作業の進展にしたがって、論文を作成して状況把握に努めた。成果は下記の通りである。

## 4. 研究成果

### (1) 調査

調査により収集した主要な史料は下記の通りである。

徳島県松茂町三木文庫(大藍師・三木家)の肥料仕入れ・販売の帳簿についての調査を実施し、明治10年代まで撮影完了。

徳島県鳴門市山西家(撫養の廻船問屋)、東京・国文学研究資料館所管分の肥料関連帳簿は撮影完了。徳島分は徳島大学版マイクロ

フィルムからのデジタル化完了。

滋賀大学近江商人資料館小島家文書（東近江市・肥料商）、勘定帳・仕入れ帳の撮影が完了。

兵庫県姫路市飾磨・高島家文書（魚問屋・肥料商）、肥料商売に関する文書を撮影完了。

兵庫県相生市・浜本家文書（肥料商）、買仕切控帳、干鰯当座帳などの帳簿を中心に近世分について撮影完了。

東洋大学所蔵・大坂近江屋市兵衛家文書（干鰯仲買商）、帳簿の撮影完了。

大阪府貝塚市廣海家文書（廻船問屋）、肥料関係帳簿の明治初年まで撮影完了。

以下、大阪府羽曳野市塩野家文書、香川県立文書館、倉敷市史編集室、山口県立文書館などで関連調査を行い、関連史料を収集した。

## （2）成果発表の概要

論文「幕末維新期の畿内先進地域の肥料商（1）（2）」（『東洋大学文学部紀要』62、63 集史学科篇 34、35 号）では、摂津尼崎の肥料商梶屋の幕末維新期の経営分析を行った。商品的農業がもっとも進んだとされる西摂津木綿・菜種地帯の肥料商の経営実態は、その重要性にかかわらず全く知られていなかった。尼崎は西宮と並ぶ西摂津の中心都市で、大坂より早く、干鰯問屋が成立したといわれる。梶屋は尼崎中在家町の年寄で早くから干鰯屋を営んでいた。梶屋は文政期から両替商を兼業し、幕末期には酒造業にも進出していた。その肥料商売の状況が天保期以降について明らかとなった。梶屋はこの時期は、兵庫を中心に、大坂から干鰯・鯡の魚肥を仕入れていた。天保・弘化期には大坂からの仕入れが激減し、嘉永・安政期にやや回復した。特定の商人と仕入れを一定程度継続して行うこともあったが、これに縛られるものではなく、中断・再開が普通に行われていた。その都度、取引先を選んで仕入れていた。慶応期

になり、魚肥の高騰と払底が目立つと、大坂湾岸の各地から仕入れることも見られた。安政期には、干鰯・鰯粕から鯡粕への転換が見られた。その原因は関東よりの干鰯・鰯粕の減少であり、明治4、5年頃から、これが回復したことがわかる。また仕入れ量そのものは、慶応期に急減して、弘化・嘉永期の四分之一程度までになった。慶応期国訴にみられる肥料の高騰・払底という窮状が現れているといえる。

いっぽう肥料販売では、安政期に木綿作地帯からより海岸沿いの米作・菜種作地域への販売圏の変更があったこと、この時期に干鰯から鯡魚肥への交替があり、それが変わらなかったという説は一面的で、海岸地域では干鰯への指向性が強かったことなどが明らかになった。ただ作物価格との関係では、米は価格高騰が肥料より高く有利であった。菜種も慶応二年まで価格上昇率が肥料の上昇率を上回っていた。木綿については、平均的には肥料の上昇率が高かったが、鯡粕・羽鯡では実綿の方が高かったこともあった。南北戦争の木綿不足もあり慶応期にはまだ決定的な打撃とはなっていないことがわかった。また一般に利用されている大坂干鰯問屋の調査価格は、梶屋の実際の販売価格より高く、これを前提にした従来の肥料高騰による農民の生産利潤低下説は、過大になっている可能性があることが指摘できた。

論文「幕末における干鰯仲買と地域市場」（『東洋大学人間科学総合研究所紀要』10号）に幕末期の播磨飾万（飾磨）湊の仲買商の経営実態を分析した。播磨は近世後期には、姫路木綿などに代表される綿作・木綿織や菜種作が盛んとなり、畿内の商品的農業を圧迫したことで知られる。その播州平野の中枢にあったのが飾万湊である。播磨では室津が中世以来の湊として重要な役割をはたしていた

が、やがて飾万湊が台頭し、室津との争論の結果、干鰯の市立てを認められると、急速に発展して明治初年には兵庫に並ぶ北前船の寄港地としての地位を確立した。この中心となった魚問屋・肥料商嶋屋の経営を分析した。これによれば嶋屋は、飾万の干鰯会所、室津、兵庫などから魚肥を仕入れ、播磨平野の広範な地域の小売商や農民に販売していた。支払いには銀札を中心に米・麦・綿で行われたが、現物の比重は高くなかった。肥料は前貸しされて、期末に支払われたが、この間利子は月1%で畿内並の利子率であった。

論文「阿波藍商と肥料市場(1)」(『東洋大学文学部紀要』64集史学科篇36号)は、畿内の木綿・菜種にならぶ商品作物藍の特産地だった阿波の大藍師・藍商三木家の肥料商売について分析した。藍は阿波藩の特産品として、全国市場で中枢的地位を占めた。その作付けには、木綿以上に魚肥が欠かせないものであった。藍は藍師が農民から藍葉を集荷して藍玉に加工したが、藍師は農民に春先に魚肥を前貸しして、藍葉を集荷した。三木家は江戸に出店を持ち関東に藍の売り場をもっていたため、直接文化後半には3、4千俵の干鰯を関東を中心に買い付けていた。文政期になると藩の設置した撫養や徳島の干鰯問屋からの仕入れが多くなり、干鰯取粕へと変化した。天保期後半からは新興の買い積み経営を行う廻船問屋と結んで、仕入れをおこなったが、幕末期には藍葉の集荷から手を引き、藍玉集荷に切り替えたため、肥料商売を縮小していった。その背景には群小の藍師や在村肥料商が成長し、地域市場が形成されていったことがあった。かつて戸谷敏之が指摘した藩や商業資本の高利貸しの吸着と商品生産農民の困窮化という枠組みだけでない様相が明らかとなった。

論文「近世後期主穀生産地域肥料商と流

通」(『東洋学研究』47号、東洋大学東洋学研究所)は下野都賀郡西水代村田村家の肥料仕入れ過程を分析したものであるが、従来、著名な割には知られていなかった江戸・浦賀にならぶ干鰯中継地関宿の問屋との取引実態が明らかとなった。関宿は利根川と江戸川の合流点付近にある河岸であるが、18世紀中葉に肥料問屋が成立して19世紀には、九十九里浜北部の干鰯・麦粕などはほとんど江戸に入らずここから関東中央部・北部に販売されるようになった。その干鰯問屋の実態はほとんど知られていなかったが、田村家との取引のあり方からその様相が明らかとなった。田村家は文化・文政期から肥料取引を開始して、天保期には麦粕を中心に1000俵程度を扱う在村肥料商に成長した。関宿干鰯問屋は注文があると市場にたいして独自の判断を加えながら、注文主に魚肥を送ったが、これを系列化しているわけではなく、逆に田村家などから貸し付けを受けて、買い付けを行っていたことが明らかになった。また糠については江戸の新興問屋との結びつきが見られ、幕末維新时期には新たな流通ルートの形成があったことをうかがうことができた。

以上、本研究では畿内綿作・菜種作地帯、播磨綿作・菜種作地帯、阿波藍作地帯、関東主穀生産地帯の分析を行うことができた。19世紀になると畿内以外の地域でも、市場は開放的になり、阿波では肥料の前貸しによる藍葉の集荷という現物決済が解体した。他の地域でも前貸し・出来秋現物決済は重要でなくなり、利子率の低下が現れている。天保期以降とくに地域市場の深化が見られており、肥料商の展開もこれに沿って行われ、かつて指摘された高利貸しの吸着と特産品生産の衰退という理解は一面的であると考えられる。今後この究明が重要となろう。また本研究により大坂湾岸・東瀬戸内海海域の肥

料市場の変動を明らかにする条件が整ってきた。史料としては分析ができなかった播磨相生浜本家文書、大坂干鰯仲買近江屋文書などがあるので、これらを加えて幕末維新期の地域市場の変動の検討を進めたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

白川部達夫「阿波藍商と肥料市場(1) 三木與吉郎家を中心に」(『東洋大学文学部紀要』64集史学科篇36号、2011年3月15日、43~80頁、査読無)

白川部達夫「幕末維新期における畿内先進地域の肥料商(2)」(『東洋大学文学部紀要』63集史学科篇35号、2010年3月15日、69~112頁、査読無)

白川部達夫「近世後期主穀生産地域の肥料商と流通」(東洋大学東洋学研究所『東洋学研究』47号、2010年3月15日、45~51頁、査読無)

白川部達夫「幕末における干鰯仲買と地域市場」(『東洋大学人間科学総合研究所紀要』10号、2009年3月12日、1~21頁、査読有)

白川部達夫「幕末維新期における畿内先進地域の肥料商(1)」(『東洋大学文学部紀要』62集史学科篇33号、2009年3月15日、87~145頁、査読無)

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

白川部 達夫 (SHIRAKAWABE TATSUO)  
東洋大学・文学部・教授  
研究者番号：40062872

##### (2)研究分担者(0)

##### (3)連携研究者(0)